＝　渡来人についての考察　＝

2018.07.25　鉄本

渡来人について、現代人が考える国という枠組みの中で考えると正しい理解が出来ません。古墳時代まで日本という国家はなく、また、「倭」という言葉も国家を示す言葉ではなく、首長制社会の集合体としての地域を示す言葉でした。古墳時代までの社会は、各地域で独立した社会を形成しつつ、互いに交易も行う相互作用によって１つの文化圏を形成した部族社会或いは首長制社会でした。例えば、北九州文化圏、出雲文化圏、吉備文化圏、丹後文化圏などです。日本のそれぞれの地域社会が独自に中国・朝鮮半島から文化を取り入れる、一方で、朝鮮半島にも日本の文化要素の影響が見られ、日本海を挟んで相互交流が行われました。この相互交流の中で、渡来人が文化面、習慣面、技術面などで当時の日本社会に大きな変化をもたらしました。如何は、渡来人についての各論です。（注）「帰化人」という言葉が、「日本書紀」の中で使われています。背景には、当時の「国家意識」があります。

（１）日本人の形成　～「骨から古墳人を推理する」～

研究者：埴原和郎氏（自然人類学）、森沢佐蔵氏（古墳人骨）、池田昌文氏（古代人骨）ら

日本人は、原モンゴロイド集団の系統である縄文人を基盤に、弥生時代以降に渡来した北方モンゴロイドが混じり合った複合民族である。

＜渡来の４つの波＞　上田正昭説

第１波　弥生前期（ＢＣ２００年頃）　土井ケ浜遺跡（下関市）

３００体超の人骨が出土（朝鮮半島北部或いは中国東北部の形質。男性の平均身長は１６３ｃｍ）

第２波　５世紀前後（応神・仁徳期）　朝鮮・中国との外交が活発化

第３波　５世紀後半から６世紀初頭　朝鮮半島南部の政治的動揺と百済人技術者の日本移住

第４波　７世紀後半（天智期）　百済・高句麗の滅亡による両国人の大量渡来

頭骨の形質を分析し日本を４地域に分類・データ収集し相関関係をみると以下のようになる。

〇在来系（縄文系）＝＜強い相関関係＞東日本、南九州

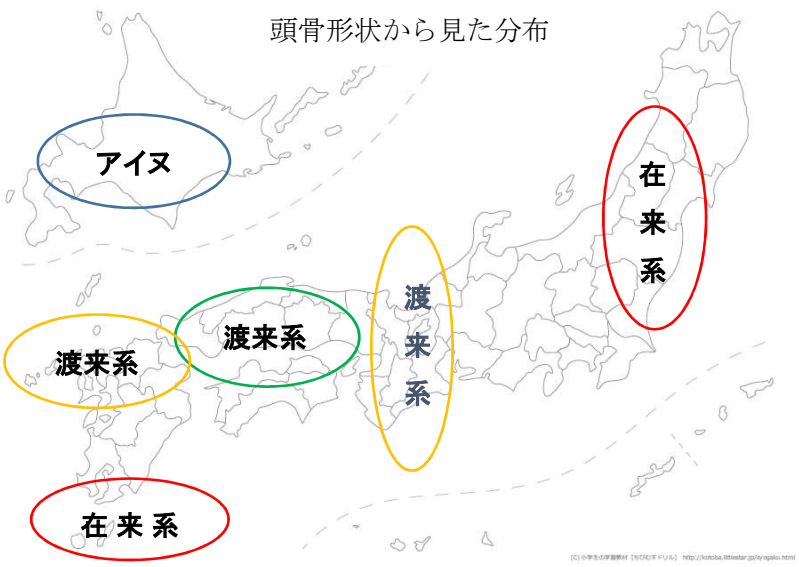
＜上記とはやや弱い相関＞関東

〇渡来系＝＜強い相関関係＞西日本、中国

＜渡来系色強く朝鮮の集団に近いグループ＞近畿、北九州

＊渡来系集団は北方モンゴロイドの影響が濃厚

＊アイヌは南方系原モンゴロイドで殆ど混血せず、独自に小進化



	在来系	渡来系
顔形	長方形	楕円
頬骨	小さい	大きい
鼻骨	広／高	狭／低
歯	小さい	大きい

渡来系の中でも、近畿と北九州では渡来系集団の影響が強い。

（ｺﾒﾝﾄ）現代は人の流動性が高く明確に分けることは難しい。

（２

研究者：埴原和郎氏（自然人類学）、小山修三氏（国立民俗学博物館）、鬼頭宏氏（歴史人口学）
小山修三氏の推計によると、縄文晩期の人口は７６千人、弥生時代は約６０万人、古墳時代は約５４０万人とされています。

縄文時代の人口が７６千人という数字は少ないように思えますが、歴史人口学者の鬼頭宏氏も８万人と推計しています。縄文中期（約５０００年前）には２６万だった人口が縄文晩期（約３０００年前）に気候変動や自然災害により激減したと言われています。３０００年掛けて元の人口を回復しています。

古墳時代の人口５４０万人という数字を別のデータを使って評価してみたいと思います。
弥生時代末期の日本を映したであろう「魏志倭人伝」には、２９ケ国、１５９千戸という記述があります。
１戸当たり５人とすれば、総人口は**７９５千人**、１０人とすれば１５９万人です。

また。大林組の試算数字（１㎥の盛り土に４．８人必要）を参考に前方後円墳築造に必要な労働力を計算すると、近畿圏の前方後円墳９４８基（約１８００万㎥）を築造するには、延べ８０００万人必要となります。さらに、全国では約５０００基の前方後円墳がありますので、単純計算で約５倍の人員が必要となり、延べ４億人の直接人員が必要となります。古墳時代は約４００年間ですから、１年当たりにすると約１００万人となります。この数字は古墳の築造作業を行う直接人員であり、この人員を支えるためには、５～１０倍程度の人口が必要ですから、**５００万人～１０００万人**が必要となります。（古墳築造の直接人員が１年３６５日毎日働くという前提で計算しています。築造に関わる時間を他の労働との兼ね合いで半年間と仮定すれば倍の数字になります。）

次に、集落数から人口を推計してみたいと思います。近畿地方の環濠集落のうち面積が計測できたもの５７ケ所からデータを集計すると以下のようになります。①１０～１００人規模集落２３ケ所（４０%）②１００～２００人規模集落１２ケ所（２１%）③２００～４００人規模集落１０ケ所（１８%）④４００～８００人規模集落９ケ所（１６%）⑤８００～１６００人規模集落（５%）　（「弥生時代の集落」弥生文化博物館編より抜粋）
この基礎データを古墳時代の集落数４２、２３２ケ所（文化庁の統計データ　Ｈ２４年）に当てはめて総人口を推計すると次のようになります。全国の集落数が同じ割合で分布していると仮定し、各集落の人口を中央値で計算すると、全国の総人口は、１０，６２０，８００となります。この数字は、４２，２３２の集落が古墳時代の４００年間廃絶されることはなく存続したという前提の計算結果ですから補正する必要があります。古墳時代の集落の消長について研究された文献はありませんので、仮に、集落の存続率を５０%とすれば、人口は
５、３１０、４００人となります。

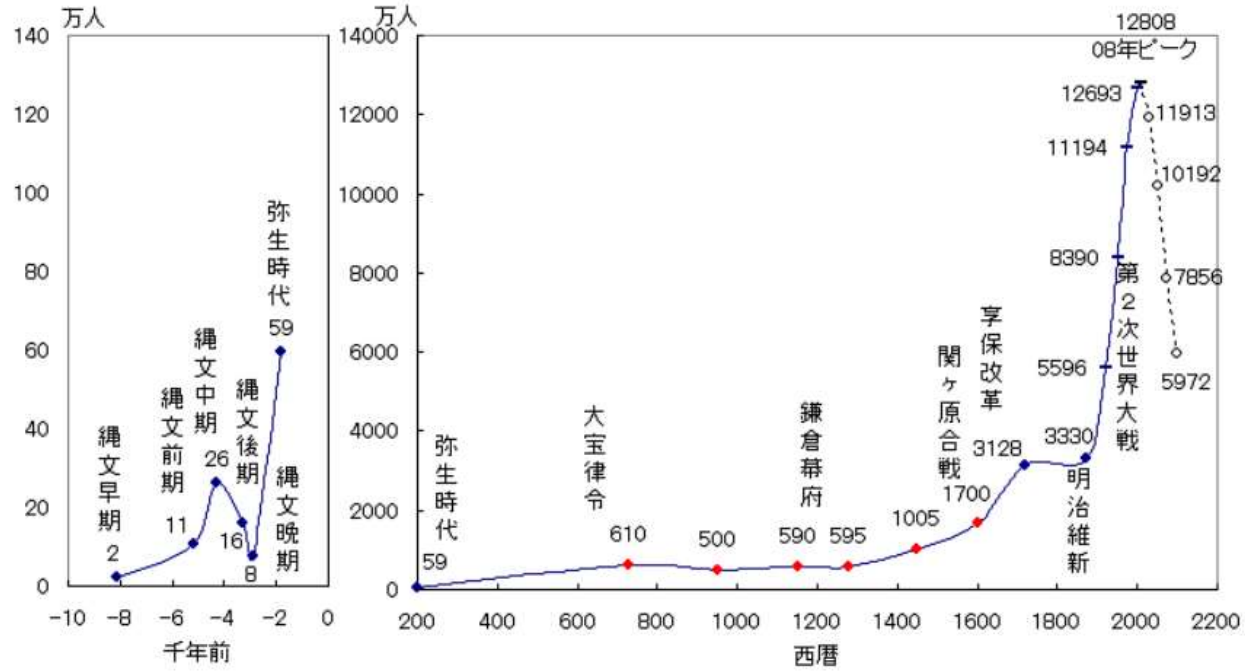
以上の非常に大雑把な計算ですが、小山氏が挙げている**古墳時代の推定人口５４０万人**という数字はある程度妥当なものと考えてよいかと思います。

そこで、人口増加率から古墳時代の人口を評価してみたいと思います。
最初の人口をＰ１、ｎ年後の人口をＰｎ、人口増加率をａとすると、ｎ年後の人口は
Ｐｎ＝Ｐ１×（１＋ａ）ｎ乗で表すことができます。
紀元元年から１０００年程度までの人口増加率は０．０４%と言われています。この数字を使って、
弥生時代末期の人口６０万人が４００年後の古墳時代末期の人口を計算すると次のようになります。
Ｐ400＝６００，０００×（１＋０．０００４）＊４００乗　　Ｐ400 の値は、約７０万人となります。
推定人口の５４０万人に対して、あまりに少ない数字です。稲作の普及によって増加率が平均値よりかなり大きかったと仮定し、１０倍の０．４%とすると、
Ｐ400＝６００，０００×（１＋０．００４）＊４００乗　　Ｐ400 は、**約２９６万人**になります。

これでも**約２４４万人の差**があります。そこで、この差の理由を渡来人とその子孫による人口増と見ることにします。

（注）人口増加率０．４%の妥当性については証明するものがないが、当時の平均寿命が約３０歳、成人の死亡率が２０%という考古学的データと、出産可能年齢を勘案するとあまり高い人口増加率は考えられません。

人口の超長期推移



（３）交流による渡来文物と渡来人の痕跡

〇渡来文物　百済系：熨斗、陶質土器、金工技術（水銀アマルガム）、甑、竈、馬と馬具、鉄

新羅系：鍔付鉄鉾、鉄鐸、甑、角杯

加耶系：鉄鋌（鉄素材）

〇文化習慣　百済系：片袖式横穴式石室、須恵器生産技術と葬送儀礼、ミニチュア鉄製品の副葬

新羅系：鍛冶道具の副葬

文字（稲荷山古墳鉄剣など）、馬の生産・飼育・殉葬

〇日本からの文物　前方後円墳２０基（全羅道）、倭系甲冑と鉄鏃（半島南東部中心）

百済の武寧王陵（５２３年没）の木棺には日本産の「高野槙」が使われている。

〇朝鮮系山城　高安城（奈良県生駒郡）、屋嶋城（高松市）、金田城（対馬市）など

〇葬送儀礼　横穴式石室＝百済、土器副葬（加耶、新羅の儀礼）

〇渡来系神社　百済王神社（交野市）、

鬼室神社（滋賀県蒲生郡　百済の鬼室集斯を祀る　白村江の戦の後渡来し学頭職に）、

王仁神社（大阪市北区）

大依羅神社（住吉区　依羅氏は百済人の素禰志夜麻美乃君を先祖とする古代氏族）、

阿麻美許曽神社（東住吉区　依羅連の先祖神　許曽は新羅の言葉で森の意）

赤留比売命神社（平野区　新羅王王子である天之日矛の妻）

高麗神社（埼玉県日高市　高句麗の高麗若光を祀り）　等多数

〇朝鮮語起源の言葉「飛鳥」：朝鮮語の安宿（アンスク、アスク）、村（アスカ）が語源　　アは接頭語

「奈良」：朝鮮語 nala は「国」という意味　（別に「なら」された土地という説もあり）

「須恵器」:「スエ」は古代朝鮮語で「鉄 Sue」の意味

（参考　金達寿『大日本地名辞書』）

〇記紀の渡来人　弓月君（融通王）：応神期に百済からの伝説の渡来人、１２０県の民も渡来　秦氏の先祖

（参考）秦の意味：朝鮮語“パダ”（波多、波陀。波旦）に関係　海という意味

阿知使主：応神期に百済から渡来、「七姓民」、１７県の民と伴に渡来　東漢氏の祖

王仁：応神期に百済から阿直伎（阿知使主と同一人物か）と共に渡来

千字文と論語を伝えた。

西文氏：王仁の子孫という説もある文筆専門の氏族　西漢氏との関係は不明

秦河勝：新羅系渡来氏族の秦氏の族長　聖徳太子より弥勒菩薩半跏思惟像を賜る。

高麗若光（玄武若光と同一人物？）：天智期に高句麗から渡来　武蔵国に高麗郡を設置

金上元：新羅からの渡来人で和銅を発見した人物（和銅元年・７０８年「続日本紀」）

〇渡来人の氏族数　～「新撰姓氏録」（８１５年）の記録～

五畿内の有力氏族数１，１８２氏が記載されている中で、全体の三分の一に近い

３２８氏が渡来系である。

（４）百済王の軌跡　～白村江の戦い～

研究者：「古代大和の謎」より瀧浪貞子氏

白村江の戦い（６６３年）後、第３１代百済王義慈王の王子禅広（善光）は難波に残り、百済王（くだらのこにきし）姓を名乗る。

天智４年（６６５）百済人４００余人が近江国神前郡に居住

５年（６６６）百済人２０００人が東国に移住

８年（６７１）余自信（百済王族）ら７００人が近江国蒲生郡に定住

その後、百済王の子孫（遠宝、敬福、三忠など）は常陸守、陸奥守、出羽守に任ぜられる。

また、鬼室集斯、沙宅紹明などの元百済高官が大輔、学頭職などの冠位を受ける。

百済王禅広の５代後の女性（明信ら４名）の中から桓武天皇の後宮に入るものが出る。

この時期の渡来人は、百済の高位高官に就いていた教養人や学識・技術を身に付けたものが多く、当時の日本の律令制による制度的改革に寄与した。

＜百済王義慈王の系譜＞

第３１代百済王義慈王――扶余豊璋　（白村江の戦後、高句麗に逃亡）

――百済王禅広（善光）――昌成――遠宝（常陸守）

――南典

――郎廣　⇒＊

＊⇒　郎廣――孝忠――三忠（出羽守）

――全福

――敬福（陸奥守）――武鏡（出羽守）――教仁（女御として桓武帝の後宮に）

――理伯――明信、明本、恵信（３名が桓武帝の後宮に）

＜高遇を受けた主な百済高官＞

〇兵法：谷那晋首、木素貴子、憶礼福留ほか　　〇薬事：賛波羅、金羅、金須、鬼室集信ら

〇五経：許率母　　〇陰陽：角福牟

（５）渡来人の東国入植（「日本書紀」の記述）

朝廷直属の勢力として東国の開拓と経営に当たる。特に、白村江の戦い以降の大量の百済渡来人は未開拓地域の開拓労働力として東国に送られた。

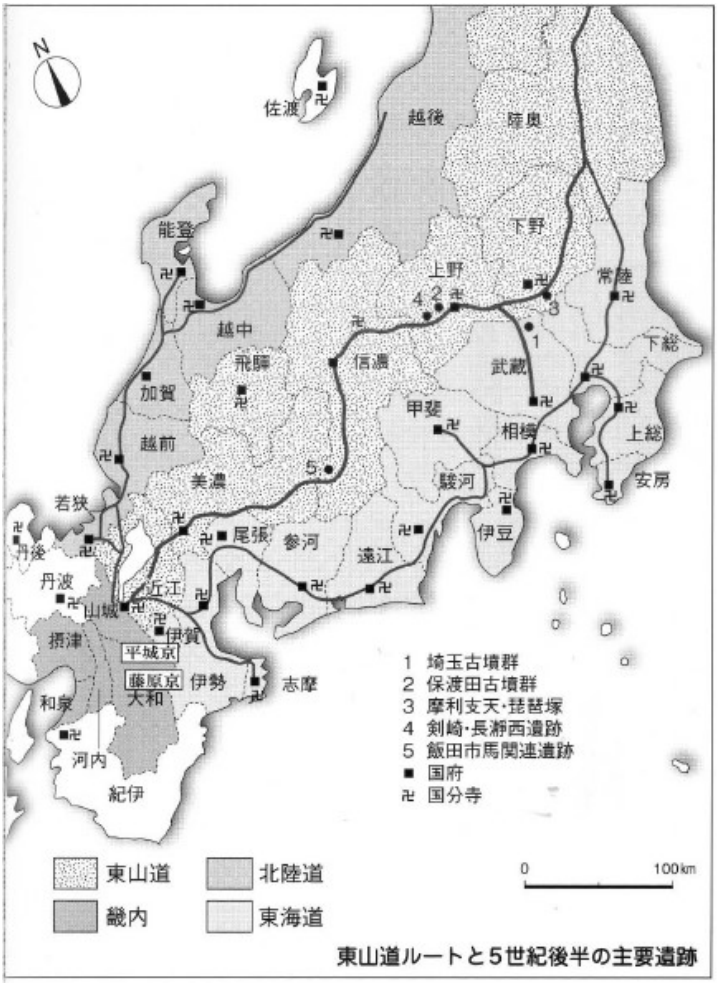
○５Ｃ後半（雄略天皇期）

剣崎長瀞西遺跡（群馬県）：群集墳、大小９基以上の円墳の他、小型方墳３基と方形積石墓５基があり、ここから渡来系人物の墓と推測される出土品が発見されている。

（朝鮮半島製耳飾り、半島系軟質土器、埋葬された馬と馬具など）

北関東の３地域（上野、北武蔵、下野）には、盟主的な前方後円墳が築かれ、政治的地域圏が形成された。太田天神山古墳（上野）、稲荷山古墳（北武蔵）、摩利支天塚古墳（下野）など。

馬の登場による古東山道ルートの成立：馬の登場により内陸の遠距離交通が可能になった。



東山道ルートと５世紀後半の主要遺跡

馬の登場以前は、東海道ルートをとり、東京湾から利根川・荒川水系を遡上して、北関東に至った。古東山道ルートの成立により、畿内と東国の直接的な交流が始まった。

「七道」ができる以前から古東山道が東北地方南部まで達していた。

「古事記」によれば、北陸道を平定した大彦命と、東海道を平定した建沼河別命が合流した場所が「相津」（今の会津）であるとされている。

（参考）

行政区としての「七道」ができるのは、７Ｃ後半の延喜式による。山陽道、山陰道、西海道、東海道、北陸道、南海道

出典：列島の考古学「古墳時代」右島和夫・千賀久　河出書房新書

○６Ｃ中期（安閑天皇期）屯倉設置に伴い渡来系氏族の飛鳥部吉志が入部し屯倉を管理

横渟屯倉（北武蔵）、橘花屯倉（東武蔵）、多氷屯倉（東武蔵）、倉樔屯倉（南武蔵）

飛鳥部吉志は河内国安宿（あすかべ）郡（現柏原、羽曳野付近）の飛鳥部氏に関係

武蔵国の古墳から朝鮮風文物が出土（馬冑、馬甲、馬の旗指物など）

朝鮮風服装の人物埴輪（みずらをしない、長袖の上着、先が反り上がった沓など）

○６Ｃ末期（推古天皇期）壬生吉志（壬生部は皇子の養育に当たる職）が難波から武蔵国男衾郡に入植

壬生吉志は渡来系の一族で難波や三島を本貫とする。男衾郡８郷の開拓に当たった。

ここで大豆の生産、紙の製造、養蚕、機織りを行っている。

○霊亀２年（７１６）駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野７国の高麗人１７９９人が武蔵国に移住して未開地である高麗郡（現在の埼玉県日高市、飯能市）を拓く。

○天平宝字２年（７５８）新羅帰化僧ら７４人が武蔵に移り、新羅郡（後に新座郡　現在の和光市、朝霞市、新座市等）を建てている。

＜渡来人入植にちなむ地名＞

・上野国甘楽郡・多胡郡（和銅４年　７１１年建立）

多胡郡は１２郷以上の規模

群馬県高崎市にある多胡碑は日本三古碑の一つとされ、渡来人である「羊」という人物に

上野国３郡（甘良郡・緑野郡・片岡郡）から多胡郡３００戸を分離し支配を任せるとある。

・武蔵国幡羅郡・高麗郡（霊亀２年　７１６年建立）・新羅郡（天平宝字２年　７５８年建立）

＜百済人による開拓技術＞

・農業面：紙、大豆の生産

・道路築造：東山道上野方面と東海道相模を結ぶ道路の土木工事

・蝦夷経略事業：重装歩兵による戦備・戦術が導入　（西日本では、朝鮮式山城、神籠石の築造）

（６）稲荷山古墳の鉄剣銘文の人物　～ヤマト王権による東国経営の１つの証左～

研究者：「古代大和の謎」より和田萃氏

製作時期：辛亥の年（４７１年）

剣の持ち主：ヲワケの臣（雄略天皇に仕えた）　ヲワケの出自には、北武蔵説と大和説の２つあり

剣にはヲワケの系譜が刻まれており、歴代天皇と対比させると以下の通り。

初代　オホヒコ（大彦命）←　第１０代崇神　　鉄剣には“意富比垝”と銘文

＝四道将軍の一人とする説と否定する説がある

２代　タカリノスクネ　←　第１１代垂仁

３代　テヨカリワケ　←　第１２代景行

４代　タカヒハシワケ　←　第１３代成務

５代　タサキワケ　←　第１４代仲哀

６代　ハテヒ　←　第１５代応神

７代　カサヒハヨ　←　第１６代仁徳、履中、反正

８代　ヲワケ（本人）　←　第１９代允恭、安康、雄略

＊オホヒコ一族の役柄　“杖刀人首”（近衛兵のような役職）

＊副葬品には、直刀、鉄剣、挂甲、帯金具、馬具、画文帯神獣鏡など　　４体の武人埴輪

＜＜参考文献＞＞

・日本の古代５「前方後円墳の世紀」森浩一編　　中央公論社　１９８６

・「古代東国と大和政権」森田悌　　新人物往来社　１９９２

・「古代大和の謎」大和文化会編　　学生社　２０１０

・「前方後円墳と社会」都出比呂志　　塙書房　２００５

・「人口から読む日本の歴史」鬼頭宏　　講談社学研文庫　２０００

・「弥生時代の集落」金関恕監修　　弥生文化博物館編　学生社　２００１

・「古代日本と朝鮮」司馬遼太郎・上田正昭・金達寿　　中央公論社　１９８２

・列島の考古学「古墳時代」右島和夫・千賀久　　河出書房新社　２０１１

・「日本二千年の人口史」鬼頭宏　　ＰＨＰ研究所　１９８３

・ウィキペディア